

陽もにわかには傾き、逢魔ヶ刻を迎えようとしていた妖怪獣道。

徐々に太陽の加護が失われつつある薄暗い土道に、一つの呼吸が響き渡る。

荒げる息を辺りに散らしながら走る、大人よりも幾分か小柄な影は、乾ききった土場に汗を残して立ち去って行く。

その影が通り過ぎたすぐ後を、更に二つの物音が追いかけていた。

懸命に足を動かす影が、二つの物音から逃げているのは明白だった。

逃げる最中に時折振り向く横顔は幼く、鮮やかな着物と花の髪飾りから、影の正体がそれなりに身分の高い少女であることが窺えた。

一体どれほどの時間を逃げ続けているのだろうか。

少女の頬は赤く染まり、眼光は虚ろに前方だけを見据え、それでも後方から迫り来る恐怖から逃れようと、ひたすらに走り続けていた。

「っ!？」

しかし、彼女の逃亡劇も長くは続かない。

上等な漆の塗られた靴は、洋靴のように走る事には適していないのだ。

小さな身を地面に転ばし、少女の体は土煙の中に包

まれる。

舞い上がる砂に噎せ返りながら地面に手を付くが、少女は蹲ったまま小さな体を震わせるのみで、一向に起き上がろうとはしなかった。

いや、得体の知れない何かに追いつかれるという恐怖に、起き上がる事が出来ないと言った方が正しいだろう。

顔を響めながら体を擦る少女は、しかし自分に体を休める時間が無い事を理解していた。

今の彼女は逃亡者なのだ。追跡者からしてみれば、この絶好の機会を逃す手はない。

それまで騒がしくざわめいていた木々が、不気味な程の沈黙に包まれる。

生温い風が少女の首筋を撫で付けてゆく。音は一切聞こえない。

恐る恐る、少女は振り向いた。

「—————?」

俯せから尻餅へと体勢を立て直した少女は、すぐに辺りを見渡すが、自分を追っていた物音の姿はおろか、気配すらもが一切感じられない事に首を傾げる。

果たして追跡者は、自分に気付かずに通り過ぎてくれたのだろうか。

少女は一つ、溜め息を吐いた。

「……っ!!」

だが、狩人が一度捉えた獲物を見逃す筈がなかった。少女が安堵に溜息を吐いたその時、左右の樹上から物音の正体達が、ついに獲物を追いつめたと言わんばかりに咆哮した。

それまで彼女を執拗に追い続けていた者が大地に飛び降り、少女の双眼に映り込む。

正体は、異形。俗に『妖怪』と呼ばれる存在である。二匹の妖に躊躇いは無い。このまま、彼女を自らの糧にする事しか考えていないのだろう。

少女の顔にいち早く辿り着いたものは、彼等の空腹から催された唾液の雨。

不快な生暖かさを保った滑りけに、少女は咄嗟に顔を拭ってしまう。

それが仇となった。

唾液を拭い終えた少女が次に見上げた空には、何も居ない。しかし、地鳴りの様なうめき声は響き渡る。空ではない。ならば、何処か。答えは一つだった。

鈍色の空を仰いでいた顔を、正面に戻す。瞬間、少女は絶句した。

此処、幻想郷の主立った有力な妖怪はみな可憐な少女の姿を取っている。

だが、目の前の妖怪は古代の文献に記されている様

な、醜悪な風貌を纏っているではないか。

「昔」の少女であれば、それ程までに驚きはしなかったであろう。

しかし「今」の少女にそれを受け入れると言うのは、些か酷な話かも知れない。

例え少女が今まで見てきた妖怪少女達よりも遙かに力では劣るだろう弱小妖怪とはいえ、身を守る術を持たない、齡二桁を数えるかどうかと言った少女の眼には、目の前の存在は文字通りの「化け物」としてしか映らなかった。

そしてそれは、恐怖に直結する。視線は釘付けにされた。

恐れからくる脱力に、体を支えていた腕は肘を付いた。

それを見て、妖怪達は薄笑いを浮かべた。いや、少女の瞳に映った光景など、ただ妖怪達が口を開いただけのものだった。

少女なりの現実逃避なのだろう。しかし、妖怪達はほんの少しの猶予すらも与えてはくれない。

恐怖に竦み上がり身動きの取れない少女へと妖怪達はにじり寄っていく。

一步、また一步と。少女は、動けない。

「い……いやっ！ こないで！」